

## 九 三毒三光の信念

「無碍光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、その徳不可思議にして、十方諸有を利益せり」。如來に三光あるは、私共に三毒あるがためであります。私共身を省れば、貪瞋痴三毒の影は常に絶えないけれども、是がために如來に三光が成就せられてあると思へば、感泣せずに居られませぬ。私に貪欲の濁つた水の渦巻があるゆゑに、清らかな清淨光の救が成就せられ、私に瞋恚の熱い煙がくすぶつて居るゆゑに、涼しい歡喜光の救が成就せられ、私に愚痴の暗い霧がとどこめて居る故に、朗かな智慧光の救が成就せられたのである。「私は年をとりまして三毒の煩惱は、いよく手強くなつて參りませんが、どうした事でございませう」と聞いた時、一蓮院師は答へて「若し三毒がなかつたら、三光かけた片輪の佛に成るだらうよ」と。有難いではありませぬか。

お釋迦様のお居でになる祇園精舎の近くに、非常に酒好の老人が居まして朝から晩、晩から朝と飲みつゞける。いつもアルコール漬です。通りがかりに阿難尊者が訪ねられて、「老爺さん、其麼に酒ばかり飲んで居ないで、たまにはお釋迦様の處に来て、説教でも聽いては怎うか」と申されますと。老人は白髪頭を掻きく「御出家様、私も此年になるまで、近い處に居てまだ一度も、お釋迦様の御説教を聞いたことが御座いませぬ。一度お參りしたいくとは思つて居りますが、私は持つて生れた酒の病、酒を飲まないでは、赤子が乳に離れたやうなもので、一日も生きて居ることが出来ませぬ。それに承はりますと、お釋迦様は五戒をお説きになつて、お酒を飲んでではならぬと仰しやるとか、それでは何程有難い御説教でも叶ひませぬ、そんなことで、まあツイ御無沙汰して居ります」と呵々笑つて御説教する。

阿難尊者がお歸りになると又飲み始めた。酔うた機嫌で又外へ出て飲むの飲んで日が暮れる。夜闇の中をヨボく、千鳥足彼方へよつたり、此方へよつたり、八人連で賑かい鼻謠機嫌で、歸つて来る途中、石に躓いてバツタリ倒れた。「痛い」と云ふ程何處か撲つた。「酷い事をした、斯麼位なら飲まねばよかつた」と、始めて気が付いた。家に歸れば嬬さんから小言たらく。傷の手當をしながら、不圖畫のお話を思出し、足を引摺つて祇園精舎へ参りました。「よく参られた」と阿難尊者は、お釋迦様の前に連れて行かれる。

お釋迦様は物優しく「お、老爺さん好く來ました、大層お酒が好きださうなネ。老爺さん、茲に車に一杯薪が積んである、之を燃やして了ふには、何程の火が入るか」とお尋ね。老爺さんは訝しさに「何、豆粒程の火があれば好いのです」と答える。「ウン左様か、そらなら聞かう、お前その着物は何時から着て居るか」。「お釋迦様、この襪褌ですか、これは去年から着て居ます」。「左様か、其麼に垢染みたのを洗つて清淨にするには、幾日程かゝるか」。「幾日ツてあなた、一寸洗へば好いのです」。「左様か」とお釋迦様は莞爾して、言を改め「御身の罪は車一杯の薪のやうだが、信仰の火一つで綺麗に無くなる。御身の障は一年も着古した着物のやうだが、信仰の洗濯一遍で清くなる、御教を信じなさい」。老爺さんは信者になりました。

私共、深く如來を信じて、心の清き人となりませう。「心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す」。仕合な人となり、念々の稱名に心の垢を洗ひ日々の報謝に身の喜を致しませう。